

## 続・熊野街道を歩く ～大坂八軒屋浜から～

武井 基悦



現在の天神橋付近は渡辺津(わたなべのつ)と呼ばれ港として熊野参詣に古く昔から利用された熊野古道の起点で、平成16年世界遺産に登録され改めて認識され有名になりました。熊野三山に参詣する古道は伊勢・吉野・高山・京都からの幾道のルートがありますが、特に「紀伊路」は代表的なもので、平安中期から鎌倉期にかけて法皇・上皇の参詣ルートを往来したといわれ、また「伊勢路」は江戸時代以降伊勢詣をおえた旅人・庶民の道として多くの人々に利用されました。

◎第一回 平成24年10月13日 午後1時半に八軒屋浜に集合、解説に大澤先生にお願いしました。

渡辺津跡より坐摩神社行宮(古道王子九十九の一番王子)から街道の一つの浜路(松屋町筋)を南下、朝日神明社跡(二番目王子の伝承がある)を訪ね、八軒屋の石燈籠を明治19年に生国魂神社北門に移設され、今なお長い間にわたって人々を出迎えています。神社境内を散策したのち解散。参加者は約40名。約3kmを歩きました。

◎第二回 平成25年1月14日 午後1時半に地下鉄谷町九丁目駅に集合。

松屋町筋を南下、寺町通りを経て合邦ヶ辻閻魔堂から通天閣、ジャンジャン横丁・飛田商店街を通り抜けながら天王寺道に入り、街道分かれの地蔵より紀州街道に入り天下茶屋公園にある阿倍寺塔刹礎石、少し歩いて豊臣秀吉が立ち寄ったといわれる天下茶屋跡に到着、解散しました。約40名参加。約5km歩きました。3回目の集合地など未定ですが、追って案内します。

追記 平成22年度に積山先生解説による熊野街道めぐりを3回にわたってお願いしました。今回のコースとは違った史跡めぐりを盛り込んでいただきました。





## 会員のみなさまへ

大阪歴史博物館友の会が発足して10年が経ちました。これまで会員のみなさまには大阪歴史博物館をご利用いただくとともに、当会主催の見学会にご参加をいただきましたこと、あらためてお礼申し上げます。

こんにち博物館をとりまく社会情勢が日々変化するなか、特に大阪市においては市政改革のもとに外部団体との関係整理が課題のひとつとして取り組まれております。先頃では自治会などの地域団体すらその対象となるなど、きわめて過酷な状況にあり、今後こうした動きは博物館などの文化施設に波及する可能性も危惧されます。

友の会幹事会としましても、こうした動きに対応するべく、博物館との関係ならびに今日まで行ってきた当会の運営方法について見直しが必要との認識にいたりました。前号において結果を報告したアンケートも会員各位のご意見をうかがうことで、今後の友の会運営をどのように変えていくべきかについて検討を進めるために実施したものであります。そのなかでもっとも注目された結果は友の会の入会動機であり、比較的多くの方が入館料金の減額をその理由に挙げておられることがわかりました。

他方、博物館の運営は指定管理者制度のもと公益財団法人大阪市博物館協会が執り行っていますが、その管理期間は平成25年度までとされております。したがって、さまざまな制度の変更を実施する時機は平成26年3月ということになります。

については、平成26年3月より、博物館当局からいただいていた特典・支援も大幅に変更されることが予想されますので、現在の友の会の運営もそれに対応すべく、より徹底した自主活動団体として再度スタートするという結論にいたりました。これまで以上の会員各位によるご支援・ご助力を仰ぐことでなんとか運営を継続させていきたいと考えておりますので、何卒ご理解ならびにご協力を賜りますよう、お願い申し上げます。

なお、新制度の具体的な内容は平成25年度5月に開催を予定しております定期総会のなかでお伝えして参りますので、何卒総会開催のご案内をお待ち下さい。

平成25年 3月  
大阪歴史博物館友の会 会長 戸田健治



## たまには江戸の話でも

豆谷 浩之

特別展「天下の城下町 大坂と江戸」では、タイトルの通り大坂と江戸の城下町をテーマとしています。当館の企画で江戸の展示をする機会がめったにありませんので、ここでは展示物にからめて、江戸に関するお話をしたいと思います。

江戸時代の大坂と江戸を比べて最も大きな違いは、江戸は武家の人口が圧倒的に多く、武家地の占める割合が非常に大きいという点です。特に巨大な大名屋敷が建ち並ぶ景観は、大坂では見られない江戸特有のものであったということが言えるでしょう。

展覧会を企画するにあたって、そうした景観をビジュアルにお見せすることのできる作品を探していたところ、「江都勝景」という錦絵のことを知りました。これは、江戸時代後期の画家、歌川広重の手により天保年間(1830～40年代)に制作されたものです。江戸の名所を描いた錦絵は数多くのシリーズが作られていますが、その中において「江都勝景」は大名屋敷を画面の中心に据えたという点で他の作品とは異彩を放っています。また手法としては、大胆な遠近法が取り入れられていることが目を引く特長です。全部で7点の作品が残されていますが、展覧会ではこのうちの4点を江戸東京博物館から出品していただきました。

写真は、その中の「桜田外の図」と題された作品です。「桜田門」と言えば、現代では警視庁の代名詞として知られていますが、江戸時代には門の外側に巨大な大名屋敷が数多く建ち並んでいました。歴史に興味のある方ならば、幕末に開港を主導した幕府の大老・井伊直弼が尊王攘夷派によって暗殺された「桜田門外の変」を思い浮かべるのではないのでしょうか。

この作品は、江戸城の桜田門を出た位置から、西の方を見た光景が描かれています。画面の右下の方に江戸城内堀が広がり、堀に沿ってカーブした道の向こう側に見えるのが彦根藩・井伊家の上屋敷です。白壁に赤く塗られた門が特長です。画面中央のやや左より、堀の向こう側をよく見ると、滑車が三つ並んで描かれていることに気づきます。これは「桜の井」と呼ばれた井戸で、江戸でも有数の名水として知られていたそうです。井伊直弼が襲われたのは、この井戸のすぐ近くであったということです。堀端を行きかう人々は、この絵が描かれた20年ばかり後に、歴史を揺るがすような大事件の舞台となろうとは想像すらしなかったことでしょう。

せっかくなので実際に現地に行ってみました。井伊家上屋敷の跡地には、現在は憲政記念館が建っています。周囲が公園になっていることもあって、緑の多い広々とした印象でした。江戸の大名屋敷跡は、ビル街になっているところもありますが、このように公園になっている場所も少なくありません。江戸時代の都市のあり方が、現在の都市景観にも大きく影響していることを実感することができました。



現在の桜田門外



桜田外の図

連載

# 「浪花百景」

～住吉高燈籠 住之江区浜口西～

第17回

千倉 康由

江戸時代になって海上交通が特に盛んになると、夜間大坂湾に出入りする船のあめの目印が必要となり、住吉公園の西十三間堀川町に建てられたのが我が国最初の燈台『住吉の高燈籠』であります。

戦後、上部の木造部分は解体され、現在地（国道26号線沿い）に外形は元のままで鉄筋コンクリート造りとして復元再建されました。

平成17年8月に内部を改装して史料館となりました。一般公開は毎月第1第3日曜日の10時～16時までです。ライトアップもされています。

最寄駅は南海本線『住吉大社』下車（公園を突き抜けた国道26号線沿い）



## 特別展 幽霊・妖怪画大全集

幽霊や妖怪は古来より想像され、江戸時代以降は特に文学や芸術において盛んに取り上げられ、多様な作品が作り出されます。それらを精力的にコレクションしたのが、日本画家の吉川観方（1894～1979）です。本展では、現在は福岡市博物館に所蔵される観方の収集品から、伊藤若冲や円山応挙作と伝えられる肉筆画、歌川国芳らの浮世絵など、幽霊・妖怪画の優品を多数紹介します。また、大阪ゆかりの幽霊や妖怪にまつわる歴史的な資料も展示します。

特別企画として、YK148（ワイケーアイフォーティーエイト）総選挙を行います。会場内に、あなたの好きな幽霊・妖怪を選んで投票し、順位を決める総選挙の投票所がありますので、ぜひお楽しみください（投票は5月13日（月）まで）。詳細は展覧会公式サイトをご覧ください。

公式サイト：<http://yurei-yokai-osaka.com>

**平成25年4月20日（土）～6月9日（日）**

- ◎休館日／火曜日
  - ◎開館時間／午前9時30分～午後5時（金曜日は午後8時まで）
  - ◎会場／大阪歴史博物館6階 特別展示室
  - ◎主催／大阪歴史博物館、毎日新聞社
  - ◎後援／テレビ大阪
- ※ただし、入館は閉館の30分前まで。



相馬の古肉裏 歌川国芳 福岡市博物館蔵



河童図 大阪歴史博物館蔵

### 編集後記

このたび何とか年度末ぎりぎりです『歴友』第23号刊行をお届けすることが出来ました。会員のみなさまには「まだか」とご心配をおかけしたことと存じます。あらためてお詫び申し上げます。

さて、今回原稿をいただいた豆谷学芸員は特別展「天下の城下町」(～3/25)を担当されました。「展覧会をごらんになっていない方にも楽しめるものを」というややこしい注文でしたが、さすがに担当者、面白い文章をお寄せ下さいました。桜田門は今年の大河ドラマ「八重の桜」でも取り上げられていました。ご覧になった方もいらっしゃるのではないのでしょうか？  
(友の会事務局 加藤)